

特定非営利活動法人サロン 2002

《2014年11月 月例会報告》

ドイツに学ぼう 育成システムとブンデスリーガ

山下則之 ((一社)独日スポーツアカデミー協会代表理事)

高田勝敏 (SV Empor Berlin)

【日 時】2014年11月20日(木) 19:00~21:30

【会 場】筑波大学附属高校3階会議室

【テーマ】ドイツに学ぼう、育成システムとブンデスリーガ

【演 者】山下則之 ((一社)独日スポーツアカデミー協会 代表理事)、高田勝敏 (SV Empor Berlin)

【参加者(会員・メンバー) 12名】

安藤裕一(筑波大ハンドボール部OB)、牛木素吉郎(ビバ!サッカー研究会)、奥崎覚((株)コリ一)、春日大樹(筑波大学人文学類4年/蹴球部OB)、岸卓巨(中央大学大学院)、小池正通((株)La Esperanza)、小池靖(サッカースポーツ少年団コーチ)、齊藤宣彰((有)JLA ASIA)、笹原勉(日揮)、高田勝敏(SV Empor Berlin)、中塚義実(筑波大学附属高校)、山下則之((社)独日スポーツアカデミー協会)、

【参加者(未会員) 3名】

石原俊秀((株)パルカ)、玉井大輔(都立国立高等学校ラグビー部OB)、嶋崎藍

注)参加者は所属や肩書を離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません。

【報告書作成者】春日大樹

< 目 次 >

第I部 ドイツ研修について(山下則之)

1. ドイツジャパンフットサルフェスティバル
2. ドイツ研修の様子
3. ブンデスリーガのスタジアム
4. ドイツ研修の意義
5. 得点数と観客動員~ナゲル氏の講演から
6. 日本とドイツの観戦者調査
7. ドイツサッカー発展の理由

質疑応答1. 日本とドイツの情報提供

質疑応答2. ブンデスリーガのテレビ観戦

質疑応答3. 観客数が多い理由

補足1. チケットに含まれる電車賃

第II部 早生まれ選手と地域活性(山下則之)

1. 早生まれが不利な日本のシステム

2. ヴィアティン桑名

3. 桑名の活動の意義

質疑応答. 桑名の選手活動

第III部 SV Empor Berlin の活動について

(高田勝敏)

1. チーム概要

2. 育成部門の発展

3. ホリデーキャンプ

4. クラブ発展のジレンマ

5. 幼稚園・小学校プロジェクト

6. 地域クラブの生き抜く方法

質疑応答1. コーチの育成方法

質疑応答2. ホリデーキャンプの参加者

第 I 部 ドイツ研修について

1. ドイツ・ジャパン・フットサルフェスティバル

Jリーグの場合は、意外と自分のところに自前のグラウンドを持って経営しているところが少なく、いろいろ自治体のグラウンドを貸りたりしている。でもフットサル場だけ見ると、すごくこう、全部自前なんですね。

本大会を始めた理由は、2009年にJリーグの仕事から離れ、愛知県に戻ったとき、豊田市にフットサル場が沢山あることを知ったことです。また、フットサル場を経営している人同士のつながりは乏しく、自分のところだけでイベントをやっているといった状況でした。フットサル場はJリーグと違い、自前のグラウンドを持っているので、もっとその施設を活用できないかと考えました。そこでいろんな経営者の方と話をしながら、最初は4つの会社から大会が始まり、現在は8社14会場で行えるようになりました。今大会は6月1日が決勝大会に行われましたが、これに向けて12月から半年かけて各都道府県で予選を行いました。決勝は東海フットサル場という野外に6面のコートがある大きなフットサル場で行いました。また、今回協力してくれた8社の無料使用券を参加賞として配布しました。

愛知県がいよいよフットサルW杯の会場に立候補し、今後もし実施となれば、この大会がいろんな力を貸すことができと思っています。その為にも、大会の冊子を県内に配るなどして、フットサルの興味を持ってもらいつつ、愛知のフットサル場との連携を深めていきたいと思っています。そしてぜひ大会を続けていきたいと思っています。

名前がなぜドイツ・ジャパンになっているかと言いますと、私自身がドイツのサッカーやスポーツ環境・文化が好きで、それを多くの人、特に若い人に経験して欲しいということがありました。そこで色々なスポンサーの方をお願いして、ドイツへ行きたいという若者に補助金を出しています。今回は少し予算不足だったので、以前より減って、ひとり10万円を6人分、補助金を出すことができました。そしてこの大会の参加者の内、抽選で当たった人には補助金を、残念ながら漏れてしまった人には自腹で参加してもらいました。

2. ドイツ研修の様子

できるだけ、自由な時間を設けて、朝帰りの子もいるし、いろんな楽しみ方をそれぞれが出来るようにこちらでの計画は出来るだけ少なめにしている。

空港に着くと、参加者みんなほっとした様子になります。我々の泊るホテルはドイツサッカー協会とコメルツバンクアリーナ（乾、長谷部所属のフランクフルトのスタジアム）は歩いてすぐ。裏にはオリンピック協会があるところに建っていて、スポーツに関するものに囲まれています。そこで今回は、コメルツバンクアリーナのスタジアムツアーを計画しました。加えて、偶然にも2日目に、女子ブンデスリーガの開幕イベントがあって、レセプションを見せてもらえることになりました。このようなイベントに出入り

できるというのは、日本ではなかなか難しいですが、ドイツでは意外と簡単に出入りでき楽しかったです。

毎年、研修の参加者は、ドイツの総領事館を表敬訪問しています。去年から領事が代わってとてもおしゃべりが好きな方になり、1時間のうち7割はいこの方が話していたのではないかと思うくらいでした。そのように大変気を使っていただき、学生たちには勉強になったかなと思います。また、フランクフルトにある沢山の日本企業で働かれている方のうち、サッカーを楽しんでおられる方も多く、その方々が楽しむためにドイツで作ったクラブとも毎年試合しています。あとはヘッセン州のスポーツ協会のホテルにある体育館にはプールもあり、いろんなスポーツが楽しめるようになっていました。スポーツ以外ではお酒を飲んだり、ハイデルベルクを観光したり、ドイツの食べ物を探したり、中には朝帰りの子もいましたが……。そのように個人で楽しみなさいと、みんながそれぞれ勝手に動いていました。

3. ブンデスリーガのスタジアム

僕自身の感じ方が変なのかもしれませんが、子どもの頃の学校の運動会のような、そういったピッチとお客さんのその雰囲気を感じられる。

研修中は2部の試合を観戦しました。スタジアムでビールを飲みながら、サッカーを観るのはすごく楽しいです。スタンドも、たとえ2部でもすごい盛り上がりで、おらが町のトップチームという雰囲気を作り出し、スタジアム内がとても楽しいです。Jリーグだと松本山雅がこれに近い雰囲気になっています。選手のレベルも、たまたま2部にはいるけれど、バイエルンなどで周りの選手が上手く使ってやればスターになりそうな選手が何人かいました。あとはいつも思うことで、スタンドには子どももたくさん来ていて、家族で観に来る人が多いです。これによってJリーグとは少し違った雰囲気です。また、ピッチとスタンドのお客さんが近い。選手を身近に感じられる雰囲気があります。

4. ドイツ研修の意義

そういうつながりをいつまでも持っていきながら、地域でスポーツをどうやって広げていくのか、彼らが頑張ってやって欲しい。ぼくがやる訳にはいかないんで、この経験をした人たちがまたリーダーとしてやって行ってほしいと思います。

この研修に3年続けて参加してくれている人もいます。彼等はアルバイトで1年間お金をためて来てくれています。それから、行ってきたメンバーで日本でも何かしようという話になり、今までの3回でドイツに行ったメンバーと年末に集まる計画をしています。これを、3年続けて参加してくれていた子が幹事として進めてくれています。こういったつながりを持ちながら、彼らが地域でスポーツを広げていく時のリーダーとして活躍して欲しいと思っています。

5. 得点数と観客動員～ナゲル氏講演から

やはりあの、ゴールをするということが、どれだけお客さんの感動を呼ぶか、それから経営という面においても、ゴールの数は凄く影響してくるところ。

今年もナゲル氏にプレゼンテーションを行っていただきました。彼とは2002年のJリーグのアカデミー立ち上げや、クラブライセンスについて相談をしました。

ブンデスリーガはサッカーという競技の中で、世界一の観客動員数を誇っていますが、加えて今年は1試合の平均得点数も世界トップになりました。ブンデスリーガの今シーズンの平均得点数は3.16で、対するJリーグは2.いくつでした。この得点数の増加をナゲル氏は非常に強調していました。お客さんを楽しませるためには、ゴールを決める時とゴールを阻む時のゴール前の攻防が多くあればあるほどよいと思います。そのため、ブンデスリーガでは得点が多くなってきたことは強調されていました。

コメント（高田）

最近の得点が増えていることはもちろんですが、2002年頃からブンデスリーガの得点数が高かったことは意外な感じがします。

6. 日本とドイツの観戦者調査

スタジアムに来た人に、「Jリーグは必要ですか？」とかいろいろ問うてみても、やっぱりあの、好きで来てる人のアンケートではなくて、街で聞いて「どうですか？」というアンケートをした方が・・・というよりそういうデータがJリーグでも欲しいなと感じました。

Jリーグでも観戦者調査というものは行いますが、これはスタジアム内で試合を観ている人を対象に実施し、ブンデスリーガの結果と同じような数値がでます。しかし、ブンデスリーガは同様の調査を街中で行ったものです。そして、調査はブンデスリーガが行っています。この点がドイツと日本では異なっています。日本で観戦者調査を行っている仲澤真先生に聞いたところ、日本でも同じく街中でとったアンケートをやりたいと思っていると話していました。

7. ドイツサッカー発展の理由

ブンデスリーガに行った時のイメージで、非常に選手育成に力を入れているということと、それとスタジアムの改善とそのお客さん、先ほど見ていただいたように家族連れ、おじいさんおばあさんと孫と一緒に見ているという場面がよく見られます。

UFEAのライセンスポイントの変化を見ていくと、ドイツは経営や育成は右肩上がりになっています。これがスペインやイタリアだと浮き沈みがあります。他の国と違い、ドイツではこれらの数値の変遷を定期的に調べ、改善を続けている結果だと思えます。また、スタジアムを綺麗にして、リピーターを増やすなど、スタジアムの改善にも力を入れています。

2002年にアカデミーを作ってから、選手の平均年齢が下がってきています。つまり、ブンデスリーガで選手が育っているということです。ボスマン判決後、選手の移動が激しくなり、国外にドイツ人選手が出

ていく、あるいは海外からスター選手が来るなどの現象が起きましたが、現在は育成に力をいれ、自国の選手が増えています。その代表例はシャルケになりますが、他にもそれぞれのチームで育成活動がきちんとできています。

また、ドイツ代表選手を年齢別に分けると、若い層に数えきれないくらいの選手がいることが分かります。若い世代でも活躍できる選手が育っていることがわかります。

コメント：

各クラブの努力や得点数の増加は勿論影響がありますが、観客動員数が多い一番の理由はスター選手がいるかどうかだと思います。日本のプロ野球だとそういった選手がいますし、いまテニスでは錦織選手がいるだけで、週末のコートがいっぱいになります。スタジアムのことを改善していますが、スター選手が一人いればたとえ立ち観でも観客はきます。スポーツはそこに尽きると思います。

質疑応答 1. ドイツと日本の情報提供

質問：中塚

スライドで使われているものは冊子か何かをデータにしたものですか？ブンデスリーガとして、「我々のリーグはこうだ！」という冊子を作っているのかなと思ったのですが・・・反対にJリーグでもやっていますか？

回答：山下

Jリーグは毎年データだけ集めたイヤーズブックを作っています。育成などについてはJリーグニュースの中でその都度載せています。更新する頻度は多いですが、日本のものはひとまとめにはなっていません。反対に、ブンデスリーガはまとまっています。Jリーグの観戦者調査はJリーグのホームページで見られます。

ドイツではいろいろな方面から分析をしているので、データが届きましたら皆さんにも何らかの形で紹介できるようにします。

回答：

以前のプレゼン資料は私たちのために作ってくれていましたが、今回はそうではありません。冊子はありませんが、パワーポイントをデータとして送ってくれることになっています。

ブンデスリーガはデータを全て表などにして公開しているので、すごくわかりやすくなっている。中には、選手のコスト（市場価値）についても公開しています。国産選手の契約金はあるけれど、実際は選手の懐に入ってきていないという状況もあり、そのようなことも含めて全てデータとして公開している。

質疑応答 2. ブンデスリーガのテレビ観戦

質問：岸

ブンデスリーガをテレビで試合を見るということはないのですか？

回答：高田

テレビは地上波では試合を放送せず、日本でいうところのスカパーのようなものに入らないと観られません。ただ、夕方に2時間のサッカー番組をやっていて、そこで週末の試合の全試合ダイジェストが放送されるので、多くの人がそれを観ています。

補足：

ブンデスリーガがテレビ局を持っていて、リーグ自身が運営と放映を行っています。そのため、2部の試合も全て放送しています。

質疑応答 3. ブンデスリーガの観客数が多い理由

質問：

毎年スペイン1部から地域リーグまで試合を観ているのですが、1部でも平均観客数は3万人を切っています。たとえキャンプノウでもいっぱいになるのはクラシコとチャンピオンズリーグのトーナメントからです。なぜ、ドイツはコンスタントに4万人を超えるのでしょうか？

回答：高田

ベルリンのような都会はサッカー以外の娯楽がありますが、例えばドルトムントやシャルケのようなクラブのある地域は、娯楽はサッカー以外ほとんどありません。そういった環境が結果として毎週末に7万人、8万人の観客が入る状況を生み出していった背景もあります。勿論、観客が来るように努力もしています。

回答：山下

ゴール数の増加はその一因になりますが、それ以上にブンデスリーガのクラブは、お客さんを呼ぶために毎日毎日、スタジアムの設備や、地域とのとりくみについて改善を繰り返しています。そういった日々の積み重ねの結果かと思います。また、協会とブンデスリーガのコミュニケーションの結果、地域ではチケットにバスや電車のチケットも含まれるといったことがあります（ここからチケット代に含まれるバス・電車のチケットに話題がうつる）。

補足. チケットに含まれる電車賃

JリーグとJRが上手くやってくれば・・・（ドイツのように）できるかもしれない(笑)

高田

ブンデスリーガのチケットの値段はピンキリです。15ユーロぐらいのものから、当日券だともっと安かったり、反対に高いものだと200ユーロを超えます。また、ブンデスリーガのスポンサーはDB（ドイツ鉄道）なので、チケットに電車賃を含むということができているのかもしれませんが。

山下

マインツのスタジアムは畑のど真ん中にあり、スタジアムまでは中央駅からシャトルバスに乗っていきます。行く時はバス乗り場まで行かなければならないですが、帰りは知らない間に駅にしていると錯覚するような流れで駅まで戻ってくることができます。マインツは少し特別なようですが、ドイツにはシャトルバスがうまく回っているところが多くあります。日本では試合の後、シャトルバスが来るまで待たされて、2度と行きたくないと思ってしまうスタジアムがありますので、この点もドイツから見習いたいです。勿論、JリーグとJRが上手く協力すれば、ドイツのようにできるかもしれないと思います。

コメント：牛木

9月にメンヘングランドバッハのスタジアムに行きました。ここは人口2万5千人くらいの小さな街ですが、女子W杯の時には5万人を超える観客が入っていました。しかし、今回は7万人も観客が入っていました。観客が増えた理由は、W杯後にゴール裏の座席を全て立ち観にしたことで、キャパシティが増えたからです。私の観た試合は、ウィークデーの夜でアウェイサポーターは来にくい状況でしたので、アウェイ席は空席でしたが、そこ以外はすべて満員でした。グラントバッハの周りにはケルンやドルトムントがあるので、他の街からサポーターがやってくるといったことはないだけに驚きました。また、試合には自家用車で来る人は少なく、駅からのシャトルバスで行き帰りをしていました。やはり、そのような文化、習慣になっているみたいです。

第Ⅱ部 早生まれ選手と地域活性

1. 早生まれが不利な日本のシステム

この年代（小学生）からもう、早生まれっていうのは選ばれない。チームとして結果を出そうとすると、こういう風になってしまう。日本はまだこういう大会をやってますよ。

私自身、日本でサッカーをしている子ども達の誕生日が気になってしょうがないです。例えばメニコンカップというU15年代の大会に出場した選手たちを誕生日で分けると、1月から3月生まれのいわゆる早生まれの子どもたちはあまり選ばれていません。反対に5月から8月生まれぐらいの子どもたちが選手には多く、その辺りで大会をやっているということになります。同じ調査を全日本小学生サッカー大会に出場した選手で行った場合も、同じような分布になります。勝つことを目的にチームを組むとこうなってしまうようです。

今回のW杯代表は23人中10人が早生まれというデータが出ています。最近では、U19とU15の代表チームは残念ながら世界大会に出場できませんでした。そこでこの大会について調べてみると、すべて1月1日で選手の年齢を区切られている大会でした。4月から学期が始まる日本は、9月から学期が始まる海外と違って、早生まれの選手は4月生まれの選手より1年早く育っているため、どうしても早生まれの選手が気になってしまいます。Jユースカップと高校選手権も学年（4月）で切ってしまうので、早生まれの選手は少なくなってしまいます。しかし、本来早生まれの中にもタレントはいるはずなのに、ここで切ってしまうのはいかがなものかと思います。

このような面からみていくと、日本の選手育成には筋が通っているのかと疑問に思ってしまいます。早生まれのタレントをいかに生かすか、どうしたら最後まで伸びていくのか、考えなければいけません。その上で、子どものころからチームで勝ち負けを要求するのかどうか、JFAやJリーグの言ってきた「個」の強化をどのように行っていくのか、アジアで勝てなかったことは今後にどのような影響を与えるのか気になるところです。

2. ヴィアティン桑名

空洞化から地域貢献へということで、僕がいろいろ協力させていただいて、ここの施設を改装しながら、ここを子ども達の遊ぶ場所に、そして地域に貢献しようということをやっている。

私は縁あって現在、三重県桑名市でJリーグを目指すサッカークラブのサポートをしています。このクラブはJリーグを目指すと同時に総合スポーツクラブとして、クラブ内ではいろいろなスポーツを楽しむようになっていきます。2年前にスタートし、11月16日にはいろいろなスポーツを楽しむイベントを実施しました。当日は320人ぐらいの子ども、保護者、おばあちゃん、おじいちゃん、下は0歳で上は70歳ぐらいの人たちが集まりました。そして、開会式ではチアを行い、サッカー、ハンドボール、野球、マラソン、ロボットなどの教室を開きました。特に小学生が最終的に2足歩行のロボットを作るロボット教室は非常に人気がありました。同時に、怪我に対応するため地域の接骨院にも協力してもらったり、食事ができるお店を出してもらったり、また、山梨大学の中村先生に講義もしていただきました。

ここは元々デンソーの協力会社で産業ロボット作っていましたが、リーマンショックの煽りを受け、従業員の減り、使わない施設がふえました。そこで、空き施設を改造し、子どもの遊び場を作り出しました。例えば、この人工芝のグラウンドはもともと土の駐車場でしたが、従業員の方に協力してもらい、作り変えました。来年春からは、学童保育やレストランも作りたくて、危ないところは直していこうと思っています。2年半で多くのスポンサーも付き、今年は運よく天皇杯を勝ち上がり、2回戦でセレッソ大阪と対戦しました。試合は延長で負けてしまいましたが、この地域の人々がおおいに盛り上がりました。

3. 桑名の活動の意義

子どもたちの発想を自由にさせてあげる、そういう場を作ることがぼくらには必要かなと思います。

日本にはこういったシャッター倉庫はあると思います。これらを作り変えて、暗いイメージの製造工場だったところを、自由にみんなで集まってスポーツをする明るい場所に変えていきました。また、ハンドボールも三重県トップを目指すチームがあってもいいということになり、ハンドボールにも力を入れはじめました。同じく、チアやランニング、ロボットでもトップを目指す子どもがいてもいいじゃないかと思います。それだけではなく、例えば広い空き部屋に鏡を置いてダンス教室をしたり、段ボールを沢山準備すれば、子どもたちが迷路を作り出したりしています。

このような施設で、みんなでスポーツをして、勝ち負けではなく楽しく汗をかく。その中で子どもたちがやりたいことに気づいて、中学、高校と続けてくれればいいと思います。先ほども述べた早生まれの子

どもでも、結果が出るような環境づくりを全国でしていけばいいと思います。早生まれのコンプレックスを持っている子どもは、大人になってもコンプレックスを持ち続けてしまうというデータも残っていますので、小さい子、早生まれの子でも楽しくやれる場所を増やしていかないといけないと思います。

コメント：中塚

このクラブは、出張サロンの次回有力候補地の一つです。ぜひ「サロン in 桑名」をやりたいです。

質疑応答 1. 桑名の選手活動

質問：

桑名の練習は平日も活動していますか？

質問：安藤

年配の方も参加していますか？

回答：山下

トップチームは朝から練習して、午後は地域の食堂なんかで働いています。2年前に3部からスタートして、今年でようやく1部にたどり着きました。また、子ども達は学校が終わった後に通ってきていますし、50歳、60歳でもプレーできるチームもあります。

第Ⅲ部 SV Empor Berlin の活動について

1. チーム概要

ソ連ないしは共産国であったクラブの名称にはプロパガンダが反映されていることが多く、エンポアという名前も商業系クラブに付けられた名称です。

始めにSV Empor（以下エンポア）の概要について紹介します。エンポアは1949年に創設された比較的新しいクラブです。現在はサッカーのほか、バスケット、バトミントン、重量挙げ、チェスなど9種目が活動しています。創設時期に話を戻しますと、ドイツのスポーツクラブは第2次大戦後に連合軍によって解体された歴史があり、その後、徐々にスポーツが整えられる中で、スポーツクラブも再編されていきました、エンポアはその時期に新しく生まれたクラブとなります。クラブは旧東ベルリン地区でソ連の支配下にあった地域に位置しています。ソ連ないしは共産国であったクラブの名称にはプロパガンダが反映されていることが多く、エンポアという名前も商業系クラブに付けられた名称です。

クラブが活動をしているヤーンスポルトパークは、地域の運動公園のような場所で、その中でクラブが活動しているのは人工芝2面と陸上トラック付きの天然芝1面です。なお、併設されるスタジアムでは今年的女子チャンピオンズリーグの決勝戦を行うほか、ブンデスリーガ3部の試合も行われています。

東西分裂当時のベルリンは東ドイツ領内にあった西ドイツの飛び地で、ベルリンの壁に囲まれていた内部が西ベルリン、反対に壁の外側が東ベルリンないしは東ドイツ領と呼ばれる地域でした。ベルリンの壁

と我々のグラウンドの位置関係を見てもみますと（画面を指し）、このように壁の隣りであることがわかります。すなわち、エンポアは東西ドイツの境界線上にあったクラブと言え、これがクラブの歴史に暗い影を落とすことになりました。東ドイツ政府の崩壊は、スポーツクラブへの支援の打ち切りを意味し、クラブの地域は立地による人口流出が起き、急速に荒廃。統一後の数カ月でクラブ会員の70パーセントがクラブを去るなど、ドイツ全土の中で最もダメージを受けたクラブになってしまいました。その後、90年代末にエンポアは1,290人の新たな会員と共に再編成されることになりました。

2. 育成部門の発展

エンポアのトップチームには25名選手が登録されており、そのうち21名がクラブの育成部門出身者で、その率は84パーセントなっています。（中略）84パーセントというのはこのクラス（6部）では著しく高い数字にで、これ以下のリーグでもまず出てこないパーセンテージだということです。

育成年代のチームは93年に4チームで再編されました。東ドイツ時代には、2002年W杯代表メンバーのマルコ・レーマーを輩出するなど、育成には定評のあるクラブでしたが、統一後、苦しい時期を過ごした結果、育成部門は下火になりました。しかし、現在のサッカー部門のトップが関わりだしてからの10年から15年で育成部門は発展していくことになりました。クラブのトップは統一後、ベルリンで初の、日本で言うS級ライセンス保持者で、ベルリンのスポーツエリート校で教師として務めています。

元々4チームだった育成部門は現在23チームになり、すべてのチームがベルリンのトップで戦うまでになりました。U8～U15までは各学年2チームあり、年間のリーグ戦を戦っています。今シーズン私が担当しているU10も同じく2チームで活動していますが、まだレベルによってチームを分けることはしていません。学年が上がっていくとレベル分けされたチームで戦うことになります。この他には週1回の初心者コースも開設し、まだチームとして活動のない幼稚園の子どもや、主に他のスポーツをやっている等の子ども向けの練習を行っています。今シーズンは試験的にこの初心者クラスもリーグ戦に参加しています。

ベルリンには、ブンデスリーガでプレーする、いわゆるプロのクラブがヘルタ・ベルリン（以下ヘルタ）とユニオン・ベルリン（以下ユニオン）の2つあるのですが、育成年代もその2つのクラブが頭一つ抜けた位置にいます。その下に、伝統的な強豪クラブが3つあり、Emporはその下の第3集団から抜け出したいといったポジションにいて、ベルリンの中ではトップ10といったところでしょうか。毎年数人が、ヘルタやユニオン、時にはヴォルフスブルクやハノーファーなどに引き抜かれていきます。

またエンポアのトップチームには全部で25人が登録されており、そのうち21人、84パーセントが育成部門出身者になります。勿論、彼らがU8からU19まで通してプレーしたわけではありませんが、どこかの年代でエンポアに移籍してきてトップにあがる、もしくは移籍していった選手がトップになる頃に戻ってくるなどの形を取っています。トップチームは現在6部にあたるリーグで戦っていますが、同じクラスではもっと給料がもらえるチームもある中、この84パーセントが育成部門出身者という数字はかなり珍しい数字になります。

3. ホリデーキャンプ

現在クラブが抱えているプロジェクトのひとつにホリデーキャンプというものがあります。これは学校の長期休暇中に行われる月曜日から金曜日までがひと単位のサッカーキャンプです。この期間子どもを預かって、朝から夕方までサッカーをするというものです。このようなプロジェクトは多くのクラブで行っているものですが、エンポアでは5歳から12歳までを対象にクラブの内外から参加者を募っています。クラブ外の参加者はエンポアに移籍したいと思っている選手や、長期休暇中にベルリンに戻ってくる子どもたちです。10月末の秋休みにも実施したのですが、全部で160人もの子どもたちが参加し、秋休みに開催したものとしては異常に多い数になりました。

4. クラブ発展のジレンマ

クラブの評価が高まってきたことが、ハード面の問題を引き起こし、痛し痒しというところ
です。

他のプロジェクトとしては幼稚園と高校のプロジェクト、あとはグラウンド拡張プロジェクトがあります。高校プロジェクトは、統合によって使われなくなった施設を利用してスポーツに力を入れた高校を作ろうというものです。これにはいくつかのクラブが協力しており、エンポアはサッカー部門で関わっています。新しくできる高校は公立高校で、スポーツを通じて幅広い教育を行おうというコンセプトであり、ベルリンにすでにあるスポーツエリート校とは少し種を異にしています。

次の幼稚園プロジェクトは、先ほど述べた運動公園内に、スポーツに特化した幼稚園を作って運営するという、エンポア単体で進めているプロジェクトです。公園内に新たな施設を作るので、同時にグラウンドの拡張工事も進めてしまおうと考えております。現在30チームを抱えるエンポアだけでなく、フィールドホッケーなど他の団体がグラウンドを使用するとなると、グラウンドのキャパシティーはどうしても足りなくなっています。加えて、W杯優勝の影響で夏休み明けには非常に多くの子どもたちがクラブに集まり、結果として初心者コースの受け入れをストップしないといけない状況になりました。どこの国も同じようなもので、行政が話に絡むとなかなか物事が先に進まず、またベルリン市にはお金がないという背景もあり、スムーズとは言い難いのが現状です。クラブへの評価が高まったことで、施設面で問題が起こるという痛し痒しの状況ですが、上層部が頑張っていて各所と折衝を続けてくれているところです。特に、幼稚園のプロジェクトはエンポア単体の企画なのでなんとかして実行したいとクラブは考えています。

5. 幼稚園・小学校プロジェクト

親にとっては当然楽しいイベントですし、クラブとしても地域の人々にクラブの事を知ってもらって、よい運営をすることでよい印象を持って帰ってもらう良い機会にはなっています。

最後に幼稚園・小学校のプロジェクトについて説明します（スクリーンに映像が流れる）。

この幼稚園・小学校プロジェクトには「運動・熱中」というサブタイトルがついていて、各パートナー校にエンポアのコーチが出向き、サッカーを中心にした運動を教えるというものです。14～15年のパート

ナー校は小学校 21 校、幼稚園 3 園、ひとつの学校が幾つものグループを持っている場合もあるので、全部で 50 グループ、約 600 人が毎週 1 回サッカーをしています。

また小学校は年に 1 度か 2 度、パートナー校対抗のトーナメントを実施し、幼稚園は今年なら「幼稚園ワールドカップ」という名前でトーナメントを実施しました。パートナーである幼稚園は 3 園と少ないのですが、この大会には 17 園、約 300 人の子ども達が参加してくれました。今年は 17 園を、W 杯に出た 17 国に割り振って、それぞれの幼稚園が割り当て国の旗を作ったり、ユニフォームを揃えたりしていました。どちらのイベントも多く保護者が応援に訪れ、子ども同様に楽しんでくれました。また、クラブにとっても地域の人々にクラブのことを知ってもらい、良い運営をすること好印象を持ってもらういい機会になっています。

エンポアはこの活動で、ドイツのオリンピックスポーツ連盟やベルリン協会などから表彰されています。

～インタビューから～

パートナー校の校長先生

プロジェクトは教員達にも好意的に受け止められています。放課後に子どもたちが運動する機会があることは好ましいことです。また、子どもたちにとって学校以外の「他者」と触れ合えることは非常に重要です。子どもたちは学校の先生を敬称で呼ぶので、エンポアのスタッフのようにファーストネームで呼び合うお兄ちゃんとして接せられる人がいることは教育上良いことです。エンポアは信頼のできるパートナーです。

エンポア所属の子どもを持つお父さん

彼（息子）の幼稚園、小学校がエンポアとのパートナー校だったため、このクラブを知ることができました。例えば、ヘルタのようなプロクラブがベルリン全土でこのような活動を行うことはほとんど不可能なので、地域の学校と地域のクラブがこのようなプロジェクトを進めてくれることは健全だと思うし、とてもありがたいことです。

6. 地域クラブの生き抜く方法

その街ないしはその地域の全体の共同体の一部としてうまく活動していくには、全ての、それぞれ幼稚園から巡っていくようなサークルを作っていくことだけが、唯一の道なのだと私は思っています。

今まで紹介したようなプロジェクト一つひとつとクラブの活動は、独立しているのではなく、ひとつの輪になっています。地域で恒久的に活動し、かつ良い育成やトップチームの成功を収めることに繋がっていくことが地域クラブの健全な姿だと思います。例えば、トップチームだけを強化しても選手が入れ替わりますし、予算もいつまでもあるものではありません。何年か集中してお金をかけてトップチームを強くしても、5 年経てば何も残らないということがベルリンではよくあります。その地域全体の共同体の一部としてうまく活動するには、幼稚園のような低年齢層を含め、すべてをひとつのものとして回していくサイクルを作ることが、恒久的に活動するための唯一の方法だと思います。

コメント：山下

Jリーグがスタートした時、地域巡回で幼稚園をコーチと選手で回ろうと提案したことがあります。その時、プロクラブがそのようなことをやる例は世界ではないだろうという話になりました。しかし、それでもやらないと地域とうまくコミュニケーションが取れないと言って、実施していました。

いまの話聞いて、やはり結果を出しているところはこのような活動をやっています。そのような意味では私たちの自信になります。

質疑応答 1. コーチの育成方法

質問：安藤

子どもたちに教える人の中に指導経験のない人もいますか？ その時に事前の講習などはあるのですか？

回答：高田

大人でコーチを始める方が、まったくサッカー経験がないという場合はあまりないです。勿論、コーチとして活動を始めて間もない方にはクラブ内の研修に参加してもらいます。また U17 などの選手が指導する場合は、ひとりでコーチングをやらせる訳にはいきません。そこで経験者がついて、はじめは一緒に指導を行い、慣れてくれば、彼らがトレーニングをひとつ任せるといった形になります。

質疑応答 II 2. ホリデーキャンプの参加者

質問：

ベルリン市外もしくはドイツ外からホリデーキャンプを体験させたいという目的でやってくる子どもはいますか？ また日本人が過去に参加したことはありますか？

回答：高田

エンポアに関しては、ホリデーキャンプを体験するというを目的でベルリン市外や国外からやってくる子はいませんが、ヘルタのようなプロクラブではいるかもしれません。エンポアにはハーフの子どもが来ることはありますが、日本からホリデーキャンプに参加する目的でやってきたという例はありません。

以上
続きは「ルン」で...